

さいたま市障害者社会参加推進センターだより



# ぱらネット

第11号



平成19年度障害者週間記念事業「市民の集い」平成19年11月23日  
会場・与野本町コミュニティセンター



六月から六回の実行委員会を経て  
じっくり取り組んできた今年の「市  
民の集い」、今までにない大勢の方々  
に参加していただいて、ほっと一息。  
障害のある人たちからのメッセージ  
は伝わったでしょうか。  
写真はザ・グリーンファームのみなさん  
(上)と、全国障害者スポーツ大会の報告  
に駆けつけてくれた選手のみなさん(左)

地域への広がりを  
あたたかいつながりを

# 参加者のみなさんから たくさんのパワーをいただき

総合司会 宮部 幸子

平成一九年度の障害者週間記念事業開催にあたり、各団体から実行委員を選出して実行委員会を組織することになり、私を手をつなぐ育成会から「障害者週間市民の集い」に参画することになりました。

実行委員会では、セレモニの運営やイベントの企画案の検討から始まり、各団体の物品販売や展示等の協議もされ、チラシの原案から記念行事の運営全般と、幅広く様々な視点からの話し合いが繰り返されました。白紙だった内容が一つずつ固まり、全体が見渡せるようになり、全体が作業が続けられました。委員全員の意思を統一して、当日の記念事業を完成させるのは、本当に大変なことだと感じました。

「記念事業の総合司会に、宮部さんどうですか？」の声に、「何事も経験だ」と深く考えもせず承知してしまいました。開催が目前に迫り、届いたマニュアルを何度も読み返すうちに「とんでもないことを引き受けてしまった」と思いました。不安でしたが「やるっきゃない！」の心境でした。



涙ポロポロの宮部さん

当日のセレモニーでは、優秀作品の表彰の後に、作品の発表も行われました。発表されたお二人の作文は、会場にお集まり

いただいたすべての皆様の胸に熱く響いたと思います。中学生の部で発表された、作文の中に登場する自閉症の男の子が我が子と重なり、「気持ちを平静に保たなければ」と思いながらも、涙が溢れてしまいました。障害のある人の「心の声」を聞く素直な気持ちと、身近なところで誰もができる「共に生き・支え合う社会」を作るこの大切さを静かに力強く語りかけました。

一般の部の作文も、思いやりと優しさと少しの気づきを持つと、「誰もがあたり前に暮らせる社会を作れる」と考えさせられました。見た目ではわからない障害と向き合う方々には、日々の生活でも工夫と苦労が感じられました。障害の有無にかかわらず、思いやりの心を持つことが大事だと感じました。

お二人の発表を聞き、会場にお集まりいただいた皆様はそれぞれに思いを持ち帰られたと思

います。市民の皆様を考えを直接お聞きする機会は少ないので、このような場が設けられることは、とても良いことだと思います。

講演の中では、パン屋さんで働く障害のある方もお話しをされました。信頼されて仕事を任せられ、一生懸命に働く様子が伝わりました。全国障害者スポーツ大会の報告では、活躍した選手たちが誇らしげにメダルを掲げ、その笑顔は輝いていました。

本人の輝けるところ、活躍できるところがあれば、それが心



講演の飯塚社長と従業員の田口友子さん



作文を読む後藤采香さん

豊かな生活に繋がると思いますが。人生を前向きに考え、懸命に生きる生き方は、私たちと変わらないと思います。

今回、初めて総合司会をお引き受けて、私の勉強不足を痛感しました。悪かった所は素直に見直して反省をしなければなりません。私が、私自身も少し立ち止まり、振り返る時間が作れたと思います。「市民の集い」でお会いした皆様から、すばらしいメッセージを受け取ることが出来ました。

また、緊張のなかにも、楽しく貴重な経験をさせていただいたことに感謝したいと思います。

## 平成十九年度 心の輪を広げる体験作文 さいたま市中学生の部 最優秀賞

### 大切な友達

一つの言葉から

中学二年 後藤 采香

「ずっと友達、ずっと一緒……」

何年前か前、彼が身振り手振りをして一生懸命に伝えてくれた、転校してしまふ私への最後のメッセージ。この言葉思い出す度に、とても懐かしく、そしてとても心が温かくなります。

私が小学生の頃、学校の校庭に養護学校がありました。授業の一環で、よくその学校に行き、たくさんの人とふれ合いました。ダウン症の人、話せない人、歩けない人……。さまざまな障害を持った人たちと、イベントに参加したりもしました。

運動会も、養護学校の人達も一緒になつて徒競争、ダンス、学年種目をやりました。後からビデオを見ると、何とも言えない気持ちになりました。そこには、一生懸命踊っている彼らがいきました。

私は、彼の出る種目のたびに、「あー、ついに順番が回ってきちゃったよ。このままだと点数もらえないじゃん。」

という声があつたことを思い出します。みんな言つてはいけなさと分かつ

ていても、つい口に出してしまつたのです。

ところが驚いたことに、彼が走り出した途端、私達は熱心に応援してました。彼が走り終えた後、一斉に拍手が起こりました。

「よく頑張った！ お疲れ様！」

みんなが彼に声をかけました。次の瞬間、私は彼の表情に釘づけになりました。今まで一度も見なかったのないうな、とびつきの笑顔だったからです。それは、まぶしいくらいでした。

応援席にもどつて来てからも、その笑顔は変わりませんでした。心の底から、「やったよ。走りきつたよ。」

という声が聞こえてくるようでした。本当に言っていたのかもしれない。

「ぼく、走つたよ。頑張つたよ。」

つて。その嬉しそうな様子を見ながら、ふと私は走る前の彼の顔を思い出してみました。少し引きつったような、苦しそうな表情。多分、ものすごく不安だつたに違いありません。私達ときたら、「彼が走ると遅くなつてしまふよ。」とか、「何人に追い越されてしまふよ。」なんてことばかり考えていて、彼の気持ちなんて、少しも考えようとはしませんでした。ハズカシイ……。

人はたとえ思うように上手く話せなくても何らかの形で、周りに伝えよう

と信号を送っているのかもしれない。きっと、彼らが伝えられないのではなく、私たちがそれに気がついていないだけなのです。そう考えると、今の学校生活でもそうです。先生の言葉、友達の言葉、その中にある大切なものを、見過ごしてはいけません。自分とは違う、自分とは合わない、上辺だけで判断をしている事が、あまりにも多くはないでしょうか。私たちは、それに気づこうとする心を絶えず持つていなければいけないのではないのでしょうか。相手の表情や、言葉に耳を傾け、心の声を聞き、想像力をはたらかせるべきだと思います。

私は、彼と出会って、一緒に頑張つたことで、少し彼の心の声を聞くことが出来たような気がします。

今でも年に一度、素敵な笑顔の葉書が届きます。そして私はまた、元気をもらうのです。

この社会で共に支え合つていくなかで、心の声を聞き、想像するという力は、とても大事なことだと思います。それは、障害が有る無しに関係なく、家や中学校生活でも同じことだと思えます。私はまず、身近な所で努力をしてみようと思います。家族の声を聞き、友達の声を聞く。そして、しっかりと受け止めて考えてみる。そうすることで、人にやさしく、温かい関係を少しでも広げていけたらと思います。

「ずっと友達、ずっと一緒……」  
大切な、大切な私の思い出。そして友達。



障害のある人もない人も  
共に生きる社会を目指して

## 過去の課題から学んだ今年の「市民の集い」

### 地域へのメッセージを込めて

十一月二十三日朝、会場が開く前にコミセンに実行委員が集まってきました。前もって八時半に開けていただけなのかとお願ひしたのですが、できませんと言われてあきらめかけていたら、会場は開かないけど、玄関は少し早めに開くという情報を掴んで、事務局を始めとしてグリーンファームのみなさんも遠くから駆けつけていました。

条件の整わない中で板ばさみ状態を何度も経験させられると、ともかく思うようにならないことだらけなのに、なんでこんなな胃に穴の開くような思いをしなければいけないのかと、ずっと思っていました。

しかし、障害者自立支援法がらみで大都市特例がなくなり、政令市も普通の市並みに扱われることになったといわれ、社会参加推進センター事業（障害者週間記念事業もこの中の一つ）

もやらなくてもいいことになったといわれたとき、「やれやれ、よかった」と思わなかったのは、基盤整備皆無の中で動き出してしまうた自立支援法の理念の一つ「地域移行」つまり、施設を出て地域で暮らそうといわれながら、地域の人たちといっしょに活動する仕掛けがさいたま市の中に構築されていないと痛切に感じていたからです。

一つ一つの企画に、地域へのメッセージを込めて組み立てて行きたいと思いました。音楽に触れて生きる力を取り戻した青年、講演もただのサクセスストーリーではないものをもっていました。

### 手ごたえを感じた実行委員会

実行委員会の立ち上げは六月でした。実行委員は各障害者団体からひとり、具体的な役割を責任を持ってやっていただきました。実行委員会六回、事務局会議一回、反省会一回。行政担

当者の方も、毎回出席されていっしょに悩んでいただきました。お疲れさまでした。

さて、一番の難題は参加者の動員です。せめて、会場がある中央区の関係機関にはフルに情報を伝えようと、区長にもお願いに行きました。自治会、民生委員、小中学校のPTA連合会には顔を見てご挨拶してチラシをお渡ししました。

当日は好天にも恵まれて、参加者の出足も好調でした。式典が始まって作文の発表があるころには、会場は立っている方の数が増えて、暑いくらいになりました。物品販売の会場はごった返していました。

反省点もいっぱいありました。せっかくの福祉機器展示会場は、閑古鳥が鳴いていました。作品展は見ていただけたでしょうか。それでも事業としてようやく一里塚は越えたかなと思っています。

実行委員長 浅輪田鶴子

「障害者週間」市民の集い アンケート結果（抜粋） ★回答数 41

3. 今回のイベントは楽しかったですか？

楽しかった30 楽しくなかった1  
どちらとも言えない2 無回答8

4. 今回のイベントで特に印象に残ったものは何ですか？

記念講演 飯塚哲朗氏14 人形劇 赤ずきん8  
ザ・グリーンファームの音楽演奏25 作品展8  
団体展示3 その他 福祉機器展1 作文朗読2  
齋藤茂男さんの体験談2

【記念講演 飯塚哲朗氏】

- ・飯塚さんの、大人になった障害者の暮らし、張り合いがしに、対等の人格と言う目線で仕事を考える姿勢に考えさせられるものあり
- ・やさしさの中にも経営者としての厳しさと人間性の豊かさが混じりあって感動した
- ・会社設立運営に対しての苦勞話に感動した

【人形劇 赤ずきん】

- ・子供の頃の童話の世界に没頭できた

【ザ・グリーンファームの音楽演奏・体験談発表】

- ・一緒にうたうのがよかった
- ・齋藤さん父子の話を交えての内容が心にしみた。元気が出た
- ・親の愛情を感じさせられた
- ・いじめのむごさを改めて思った
- ・聴覚障害者なので、歌詞を全部書いてほしかった
- ・生で大きく本格的な演奏がよかった
- ・演奏が心に響いた

【作文朗読】

- ・中学生の作文朗読に感動した

5. その他自由な意見

- ・なかなか障害者を知る機会がないので。日常の暮らしがりを知るよい機会であるので
- ・各障害の理解を深める大切な場所
- ・障害を特別なことと思わず、誰もが幸せに暮す為にはどうしたらいいのかを考えるきっかけになったから
- ・日々の生活に追われ失いがちな人間としての感動を与えていただけるので
- ・健常者と障がい者が本当に共生できるさいたま市になってほしいので
- ・一年に一度市民と一緒に楽しめるイベントであり、また、障害者理解に良いイベント
- ・多くの市民に障害者を理解していただくため、いろいろなイベント企画をお願いしたい
- ・事業主である方の話は自分に力を与えてくれた
- ・障害者の力作を一般地域の人々に味わってほしい。
- ・作品をもっと長く展示する場所があったらよい
- ・昨年よりとてもよかった。もっと市民にアピールする方法を考えたい
- ・グリーンファームはもう少しポピュラーな曲が望ましい
- ・会場設営に問題あり
- ・街で障害者が普通に暮すためのいろいろの社会との接点がありました
- ・会場も適当でよかった
- ・いろいろな出店もよかった
- ・もう少し一般市民（健常者、子供）に参加させたい
- ・写真、作品展示はもう少し目線位置に展示したほうがいい
- ・作品展に参加賞も出ないのは淋しい
- ・来年も与野コミセンで行なわれることを希望する



もっと見ていただきたかった福祉機器の展示会場



障害のある人たちの力作も、たくさんあったのですが……

## 実行委員からつづつ

たくさんの笑顔  
ありがとうございます

与野赤十字奉仕団

内野 芳子

私たち、与野赤十字奉仕団は、現在メンバー十三名で、老人介護施設「きりしき」での軽作業ボランティア、救命救急法などの講習、義援金の募金、人形劇の上演、赤十字活動のPRなど、皆様にご協力いただき活動しています。

昨年十一月二十三日「障害者週間」市民の集いに人形劇の出演依頼を受けました。「はい、喜んで……」と返事をしたものの、果して皆様に楽しんでいただけるものかと不安でしたが、小学生に喜んでもらえた人形劇、きつと大人の方々にも楽しんでいただけたものと信じて当日になりました。

午後一番のプログラム、とり



男とり子が「赤ずきん」を紹介するかけ合いから始まりました。黒い頭巾をかぶってしまうと外が殆ど見えなくなりますが、夢中で人形を動かしていました。夢中が終り頭巾をあげたそこには、大人も子供もたくさんの笑顔がありました。会場一体となつて楽しい時間を共有出来、何と嬉しかった事でしょう。人形劇を終えたあと食べた「ひつつみ汁」の美味かったこと、心

も体もあたたまりました。有難うございました。心より御礼申し上げます。

## 売り上げ好調

## 物品販売

ノーマライズうらわ

矢嶋 脩司

物品販売の担当者として各施設の販売場所の位置取りに大変気遣いをしました。

机の数の少ない施設から入口に近い場所を優先しました。

売り上げが順調に伸びて参加施設の財政にささやかな潤いを念じつつオープンに臨みました。が、意外と各施設とも好調のようでした。

売り上げを伸ばし、数店の施設では完売したとのことで大変良かったと思っています。

販売品種について感じたことは、経験的に、リサイクル品の時代は終焉をむかえた様な感じ

を受けています。

何か特徴のある、お客さんのニーズに合った商品探し求められます、大変難しい課題とされています。比較的食関係の扱いが良いようです。焼きそば店の出店が無かったのが残念に思っています。

机も整然と配置され、間取り的にも整合されていたと思います。テーブルクロスもホワイトで統一され、清潔感が漂い、商



品も引き立ち、お客さんに好印象を与えたと思います。

一重に行政関係者のご協力の賜と感謝する次第です。

お客さんと販売員のコミュニケーションも和気藹々とした雰囲気を感じ取れました。

販売トラブルも無く、安全に無事終了出来た事は関係者一同一致団結し事業に邁進した結果の成果と思います。

## ザ・グリーンファーム 楽しんでいただけましたか

もくせい会

齋藤 正男

前橋市を中心に活躍しているカントリースタイルのアマチュアバンド「ザ・グリーンファーム」の皆さんに来ていただきました。楽しい司会進行と素晴らしい演奏に会場の皆さんは大満足でした。私は「♪あの山の頂で〜ゆつくりと〜お休み〜♪」という一節が今でも感動と共に鮮

明に蘇ります。

当初7人の予定が、最終的には9名で早朝から来てくれました。演奏会場の設営に困難が予想されましたが、主催者側の配慮により、式典会場と舞台を仕切るといふ大技で問題を回避してくれました。感謝しています。

グリーンファームの皆さんによると、手話通訳の必要な方達の反応が良く、とても楽しんでいらしたことに驚きを覚えたとのこと。また機会があれば一生懸命やらせていただくとのメッセージが届きました。グリーンファームの皆さん、ありがとうございました！という気持ちで一杯です。

私と息子は、グリーンファームの前座として「みんなのうた」を担当し、会場の皆さんと一緒に歌いながら、その進行の中に経験談を織り交ぜ、精神障害者とその家族についての理解に繋がればとの思いで取り組みました。一般市民の参加が少なかつたことは残念でした。今後

は町会長さんレベルの人に案内が届くことを願いながら、筆を置きたいと思います。

## 事前の裏方作業で 参加した市民の集い

ウィーズ

藤澤 康

昨年、インタビューを受ける障害者として障害者週間「市民の集い」に始めて参加させていただきました。今年は、私共「当事者会ウィーズ」の市障協加盟により、実行委員として6月から参画し、自ら広報を担当させてもらいました。私達、精神障害者には疲れ易いという障害が



あり、出来れば「市民の集い」当日より前に責任を持ってやれる事が良いと考えたのです。

仕事の中はパソコンを使ってチラシのデザイン、市報・各新聞社への事業案内文書作成および誌面掲載への依頼でした。仕事量が多すぎるとは思いませんが、先輩実行委員・行政職員の方々のご指導を仰ぎ、何とか役目は果たせたと思っています。あえて失敗をあげるなら、当日の様子を取材してもらえなかつた事です。

最後に個人的な事になります。春から人間関係で作業所を退所すべきか悩み、精神的に辛い日々を送っていました。しかし、広報担当の仕事に没頭する事で、そのストレスから開放されて状態を崩す事も無く、また当日も大盛況のうちに終了しました。この様な事を、災い転じて福と成すと云うのでしょうか。

## あれから五十年

長根 清平

昭和二十三年四月、埼玉県立盲・聾学校へ入学しました。

戦時中一時兵舎として利用されていたこともあって、大変古い建物でした。

二十七年に聾学校が独立し、寄宿舎が完成。この頃から、盲教育と理療科のレベルが向上し、図書室も整備されました。

教科書以外の点字本が不足していたので、点訳により蔵書しなければならず、上級生がこの作業を教員・知人の力を借りて行っていました。

高校生時代に、日本赤十字社埼玉県支部に勤務されていた方のお力で、JRC活動を紹介していただき入会。

毎週土曜日の午後、近隣の高校生が盲学校を訪れて、リーディングサービス。私たちが夏休みに浦和の日赤支部へ行って点訳活動が始まりました。

浦和商業・小松原学園の方々に読んで頂きながら文学作品を点訳しましたが、一時間休まずに書いても十ページ。汗だくで取り組んだ事が思い出されま

す。大きい声で読んでくれないと聞き取りにくく、漢字を正確に読み上げて句読点・改行なども



しつかり言葉で伝える作業は、パートナーの苦労も大変でした。

昼食後、みんなで歌を歌い、ゲームも手をとって教えていただき、春と秋には、交歓会・ハイキングも計画し楽しい学生時代でした。

三年間の実績は、壺井栄の「二十四の瞳」、続いて久米正雄の「学生時代」を母校の図書室におさめ、下級生たちが読んでたようです。長編 ロマン・ロランの「ジャン・クリストフ」に挑戦しましたが、挫折しました。あれから五十年、当時の方々との交流は続いています。

残念なことは一つ、あの頃知り合った彼女を生涯のパートナーに出来なかったのが悔やまれます。

## 事務局だより

9月から協議会で働き始め4ヶ月が過ぎました。入ってすぐばり研の生活訓練等事業に参加させていただきました。車いすの人と一緒にデートをするプランで大宮界隈を散策しました。今まで車いすの目線を考えたことのなかった私は道路には何とじやまな物が置いてあるのかを知りました。車いすで動くだけでもストレスがたまりそうなのに皆さんそんなことは微塵も感じさせない明るい表情でパワーに溢れていました。これからこういう皆さんと一緒にやっていくんだととてもうれしくなったのを覚えていきます。

障害者週間市民の集いも同様、実行委員始め皆なのパワーであんな大きな催しをやる事ができたと賞賛せずにはられません。(W)

発行 さいたま市障害者

社会参加推進センター

〒333-0801

さいたま市大宮区土手町

一〇二二二二一

大宮ふれあい福祉センター4F

TEL 〇四八・六五三・七二七

FAX 〇四八・六五三・七三〇

望月 武

浅輪 田鶴子

発行人 望月 武

編集人 浅輪 田鶴子

リレートーク  
わたしはわたし

## ● 長根清平さんプロフィール ●

1940年12月23日生まれ。職業は鍼・マッサージ。家族は、妻・長男・孫二人と母。目標は3年後の5月17日、開業50周年記念日を白衣で迎えること。